

〈中央銀行パネル〉

## 銀行のかかえる信用リスク

“Japan’s Banking Crisis and Lost Decades”(with Nao Sudo and Kozo Ueda)

日本銀行 平形 尚久

日本経済の1990年代、2000年代の長期停滞の要因の一つとして、金融仲介機能の低下があげられることが多い。その金融仲介機能の低下は、銀行部門の不良債権問題や資産価格の下落などによる銀行部門のバランスシートの毀損によって生じた可能性が考えられる。

銀行部門へのショックが日本経済の長期停滞にどの程度の影響があったのかという点について、これまで定量的な評価が十分なされてきたわけではない。そこで、本分析では、銀行部門に生じたショックが、日本のマクロ経済変動に与えた影響を定量的に評価する。この評価を行うにあたり、銀行部門を組み込んだDSGEモデルを推定した。ここで用いたモデルでは、企業家だけでなく銀行も信用制約に直面しており、資金調達コストはそれぞれの純資産、すなわちバランスシートの状態に依存する。ベイズ推定を行うことによって、銀行のバランスシートの劣化をもたらした純資産のショックを識別した。

推定された構造パラメータおよび識別されたショックに基づいた分散分解によると、銀行部門の純資産へのショックは、90年代の日本経済の停滞を説明するうえで、支配的ではないものの、一つの重要な要因であることがわかった。特に、90年代後半では、銀行の純資産へのショックは、設備投資およびインフレを押し下げる効果を持ち、前者の変動の15%程度、後者の変動の20%程度を説明するとの結果が得られた。

さらに、1990年代後半から2000年代前半の銀行危機時に行われた公的資本注入に関するカウンターファクチュアルシミュレーションを行った。この期間に行われた公的資本注入を約13兆円とした場合、設備投資を1%程度引き上げる効果があったと試算された。